高橋昌男

妻の恋愛論

恋する奥さんへの手紙

海竜社

高橋昌男

妻の恋愛論

恋する奥さんへの手紙

海竜社

［著者紹介］**高橋昌男**（たかはし　まさお）
1935年、東京生まれ。慶應義塾大学文学部卒。広告代理店、PR会社勤務を経て創作活動に入る。主な著書として『夏至』『ネオンとこおろぎ』（ともに新潮社）、『音無川絵図』（集英社）、『巷塵』（文藝春秋）、『饗宴』（日本経済新聞社）など。1997年、文芸評論集『独楽の回転』（小沢書店）で、平林たい子文学賞受賞。

妻の恋愛論
恋する奥さんへの手紙

二〇〇一年十二月十日　第一刷発行

著　者＝高橋　昌男
発行者＝下村のぶ子
発行所＝株式会社　海竜社
東京都中央区築地二の十四の一　〒一〇四―〇〇四五
電　話＝東京〇三（三五四二）九六七一（代表）
FAX＝（〇三）三五四一―五四八四
郵便振替口座＝〇〇一一〇―九―四四八八六
印刷所＝半七写真印刷工業株式会社
製本所＝大口製本印刷株式会社
落丁本・乱丁本はおとりかえします

©2001, Masao Takahashi, Printed in Japan

ISBN4-7593-0692-7

妻の恋愛論

恋する奥さんへの手紙

高橋昌男

妻の恋愛論

恋する奥さんへの手紙

目次

はじめに……4

1章　退屈な日常……9

2章　結婚という制度……31

3章　反逆する妻……53

4章　夫の不貞……69

试读结束：需要全本请在线购买： www.erto

目　次

*5*章　魔がさして……91
*6*章　新しい出逢い……115
*7*章　嘘……135
*8*章　恋人たちの森……155
*9*章　めくるめく性……181
*10*章　〈個〉の自覚……199

はじめに

これは私（筆者）が昨年の夏ごろからほぼ一年にわたって、千葉杏子さんに宛てて書いた手紙を集めたものである。昭和三十五（一九六〇）年生まれの杏子さんには、広告代理店の大阪支社に勤める御主人と高二の亮太君がいて、もう十年余り芦屋市に住んでいる。

実はかの女はその昔、私が都立高校で親しくしていたクラスメートの水野（旧姓田中）千穂さんの一人娘で、幼いころから母の手にひかれて、鎌倉から遠路はるばる井の頭公園にちかい吉祥寺のわが家へ出入りしていた。そんな縁で、杏子さんが千葉庸介さんと結婚するとき私は家内ともども披露宴に招かれた。そのころお父さんの水野氏は、確か農業経済学を専攻する私大の助教授であった。

ところでお母さんの千穂さんだが、この人は残念なことに四年前、乳癌がもとで亡くなった。私と同年だから六十一のいささか早過ぎる死ということになる。……それからも杏子さんは、芦屋から時候の挨拶をかねて身辺の出来事をせっせと書いてよこして、私を愉しませてくれた。いつも感心するのは、ワープロやパソコンが万能のこの時代に便りはかならず万年筆の手書きであることで、時には巻紙に毛筆を自在にあやつって、そっちのほうはまるで駄目な私を驚かせた。芦屋に移ってから、ちゃんとした先生について書を習ったというのは嘘ではないというわけだ。

いや、書に限らない。茶道、俳句、絵画の鑑賞と、芸術的教養を身につける情熱たるや、世に有閑マダムの代名詞のように用いられる〝芦屋夫人〟の域をはるかに超えていると思われた。杏子さんは東京のさる女子短大の家政学科出身だから、子育てを終えてから、それまで抑えていた知的向上心がにわかに噴き出したのだろうか。

その杏子さんが妻として母としての悩み事を打ち明けて、私の意見をもとめるような手紙をよこすようになったのは、昨年の春あたりからである。おやっと私は思った。というより、いつも朗らかでしあわせそうなかの女に似合わせない、深刻な文面にとまどったというほうが正しい。しかし考えてみれば、かの女も早や四十、女盛りの爛熟を自覚するいっぽうで、人生の第二の難所（子育てを第一のそれとするならば）に差しかかったわけで、これからどう生きるべきか悩まないほうがおかしい、といえるのである。

ちょうどそのころ、私は新聞の連載小説を抱えていて、しかも大詰（おおづめ）を迎えており、すぐには杏子さんの要請に応えられなかった。私が忙しさから解放されたのは五月のゴールデン・ウィークが過ぎてからだ。そこでようやく、杏子さんが当面の問題としている中年の恋愛について、かの女に向けてというより、かの女と一緒に考えてみようという気になったのである。

だからといって私に確たる人生観や恋愛観があったわけではない。またかの

女に偉そうな口を利いて、〝善導〟しようなどと、つゆほども思ったことはない。第一、そんな分際でもない。人間はいろいろ、人生はさまざま、臨機応変、事にあたるしかないというのが私の処世哲学といえばいえるかもしれない。但しこの臨機応変（機に臨み変に応じて適宜な処置をほどこす）は、口でいうほど生やさしいことではなさそうだ。これにはつよい理性的判断と大胆な感情的跳躍とが、瞬時のうちに選択されなければならない。

恋愛においては尚更である。

私はその好例を、十九世紀フランスの作家フローベールの『ボヴァリー夫人』に見る。この古典的名作が私たちに示す悲劇は、いったいどこから生じたか、杏子さんと共に考えてみたつもりだ。ほかにD・H・ロレンスの『チャタレー夫人の恋人』、ボーヴォワール女史の『第二の性』などを参考にしたが、御安心あれ、難しい理屈をこねたつもりはない。

それから最後にもうひとつ、私は恋に悩む杏子さんの良人たる庸介さん、一

人息子の亮太君の立場にも目を配って、この書簡集が一種の〈二十一世紀型〉中年夫婦論になればいいと願っている。

私が送ったおびただしい量の手紙を、この本のためにそっくり返してくださった杏子さんの御厚意に深く感謝する次第だ。

试读结束：需要全本请在线购买： www.erto

1章　退屈な日常

第1信――――――平成十二（二〇〇〇）年七月十日

杏子さん、何度か頂いたお便りに梨のつぶてをきめ込んで申し訳なし。

お察しのとおり、あなたも読んで下さったという新聞連載の『輪舞』が終わったら、息つく暇もなく今度は本にするための作業に追われて、いま――午後四時、やっとペンを手にした次第です。

実はついさっき、急に夏がきたような日差しのなかをぶらぶら歩いて近所の眼医者へ行ってきました。右目の視野の片隅に糸屑のようなものが浮かぶ、いわゆる飛蚊症（ひぶんしょう）の徴候があらわれたためです。

検査の結果やはりそうだったのですが、若い先生はこういいました。「生理的なものだから心配いりませんよ」。つまり老化現象のひとつだから放って置くしかないというわけです。

家に戻って家内に報告したら、ぼくより十歳年下のかの女は「いくら若ぶっても、もう駄目ね」と鬼の首を取ったみたいな喜びよう。イヤハヤです。

ところで庸介さんは相変わらず出張、出張でめったに家に居ないとか。そして亮太君は部活の剣道の練習で帰宅は夜。まあ、あなたはお蔭でお茶や俳句の集まりに気兼ねなく出かけられて助かるとおっしゃいますが、それはたぶん強がりで、内心さびしい思いでいるのではないでしょうか。こんな僭越な憶測をするのも、あなたの流麗な文字の裏に、そういう趣味がたんなる退屈しのぎ、暇つぶし以上のものではないと訴えてでもいるような、一種なげやりな心の動きが透けて見えるからです。

杏子さん、あなたは変わりつつある。すくなくとも以前のあなたではない。ぼくにはなんだかそれが心配です。

その意味で、夏の終わりの中国旅行は恰好の気晴しになるでしょう。存分に愉しんできてください。

ぼくも去年の六月、作家訪中団に加わってハルピン、瀋陽、大連など東北部（旧満洲）を回ってきましたが、旅の印象はあの広大な大地に似て、茫漠としていまだにまとまりません。

第2信

八月十一日

昨日は秋めいた気配でまさに〝風の音にぞ驚かれぬる〟でしたが、今日は一転して酷暑、クーラーの効く部屋から一歩も出られません。

見慣れた封書の文字を見て、もう中国旅行から戻ったのかと思ったら、あれは今月の末でしたね。このごろは物覚えが悪くていけません。

冒頭の、甲子園球場のそばに住むお友達を訪ねた際の報告が面白かった。

《時どきあがる球場からの喚声。いつもは連れ込み宿風の暗い旅館の小さな玄関にも「○○高校野球部御宿泊所」といった大きな看板が立てられて、その前にファンの女の子たちが群れているかと思えば、住宅街のはずれにある夏休み中の幼稚園では、地方からの応援団が練習の蛮声をあげていて、甲子園ならではの光景が見られます》

この文章をみて、大の高校野球ファンであった先輩作家のGを思いだしました。かれは昨年、食道癌で亡くなりました。

ところで、このあいだ杏子さんの趣味についてたんなる退屈しのぎではないのかといったことで、だいぶお冠のようですね。それで、自分がどんなに真剣に取り組んでいるか、ひとつ証拠をみせてやろうと、何年か前の忘れられない思い出を――お仲間と石山寺に住むある美術史家のもとに「仁清」の講義を聴きに行った日の詳細を、るる報告してくださったわけですね。

講義もさることながら、その前に先生が書院で手ずから点ててくれたお薄のおいしかったこと、道具類のすばらしかったこと（――李朝初期の無地刷毛目茶碗、めずらしい天目釉の平茶碗、玄々斎のお茶杓など）を、そして講義のあとで秘蔵の源氏物語絵詞巻三と巻四を拝見したときの宙を舞うような感動を、私に伝えようとなさった。

降参です。わが国古来の伝統芸術にうとい不風流なぼくは完全にお手上げで

试读结束：需要全本请在线购买： www.erto